

平成28年度 全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目 次

1 はじめに

2 調査の概要

- (1) 調査の目的
- (2) 調査の方式
- (3) 調査の実施日および調査の対象
- (4) 調査の内容
- (5) 調査結果の見方

3 教科に関する調査結果

- (1) 市としての基本的な考え
- (2) 教科に関する市全体の結果
 - ①平成28年度調査の結果
 - ②直近4年間の結果における経年変化
 - ③平成25年度（小学校第6学年）の結果と
平成28年度（中学校第3学年）の結果の比較
 - ④無解答率について
- (3) A問題（主として「知識」に関する問題）について
- (4) B問題（主として「活用」に関する問題）について

4 質問紙に関する調査結果

- (1) 児童生徒質問紙より
- (2) 学校質問紙より

1 はじめに

平成28年4月に実施された「平成28年度全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。結果については、市全体の平均正答率等、数値を全国の数値と比較する形で公表しております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないよう十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容をご活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	・平成19～21年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	・平成22年度	抽出調査	国語、算数・数学
	・平成24年度	抽出調査	国語、算数・数学、理科
	・平成25・26年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	・平成27年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	・平成28年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	※ 平成23年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止		

(3) 調査の実施日および調査の対象

平成28年4月19日（火）

- ・小学校第6学年（市内25校、約1,600名）
- ・中学校第3学年（市内11校、約1,700名）

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・国語A、算数・数学A（主として「知識」に関する問題）
- ・国語B、算数・数学B（主として「活用」に関する問題）

② 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

(5) 調査結果の見方

本調査の結果で示されている平均正答率については、文部科学省の考え方に準じて整理している。

(参考)

各都道府県（公立）の状況については、平均正答率を見ると、27年度同様、ほとんどの都道府県が**平均正答率の±5%の範囲内にあり、大きな差は見られない。**

出典：平成28年度全国学力・学習状況調査 報告書 平成28年8月 文部科学省 国立教育政策研究所

3 教科に関する調査結果

(1) 市としての基本的な考え

小田原市教育委員会では、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、児童生徒の学力の重要な側面を示す客観的な資料である。

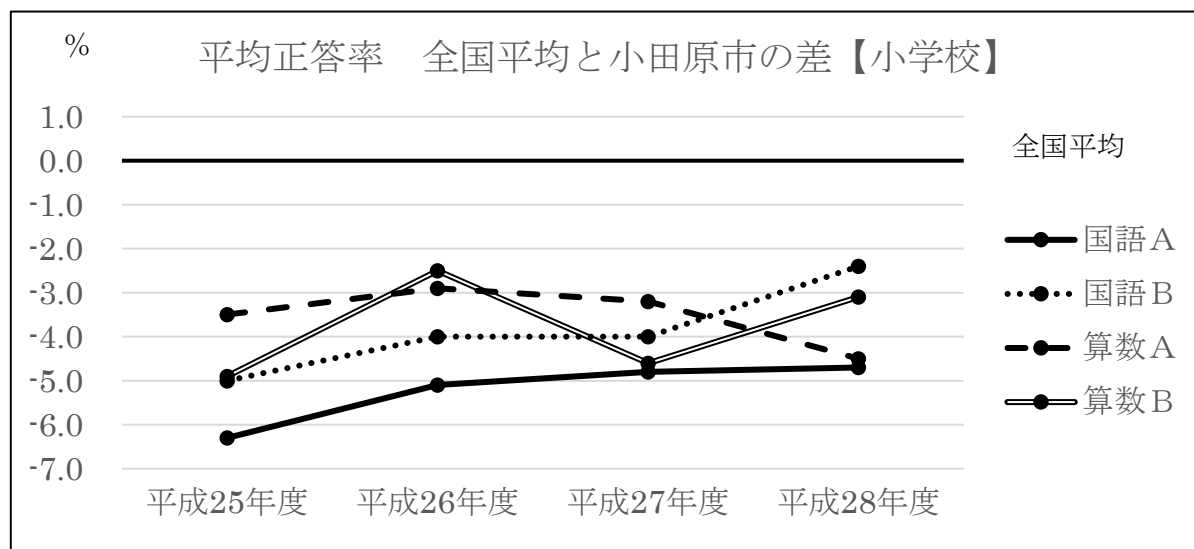
(2) 教科に関する市全体の結果

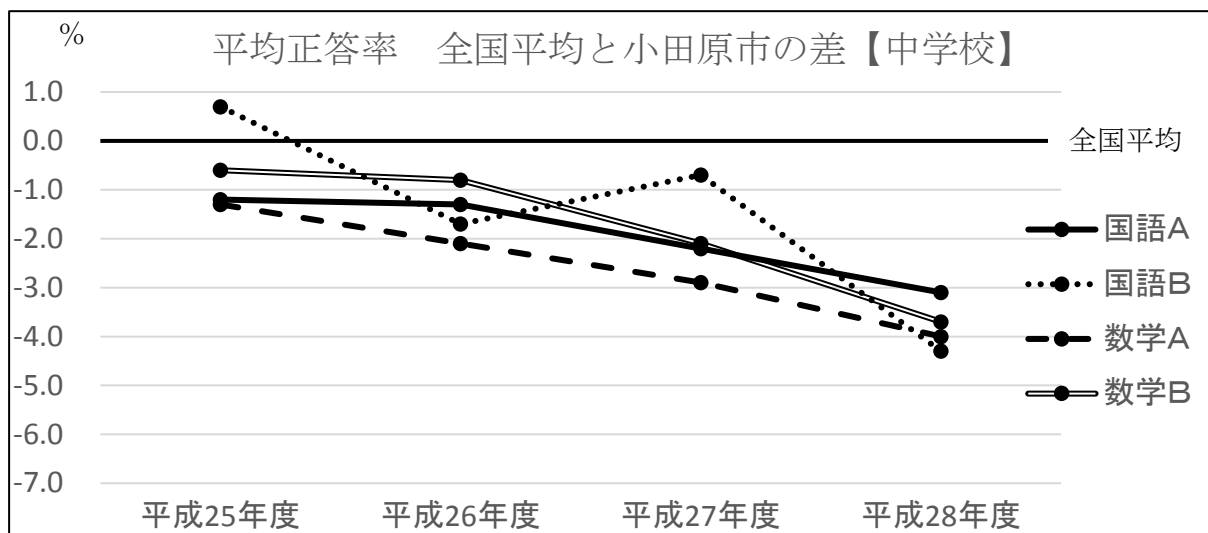
①平成28年度調査の結果（平均正答率％）

	教科	小田原市	神奈川県	全国	全国との差
小学校	国語A	68.2	70.3	72.9	-4.7
	国語B	55.4	58.2	57.8	-2.4
	算数A	73.1	76.6	77.6	-4.5
	算数B	44.1	47.3	47.2	-3.1
中学校	国語A	72.5	75.4	75.6	-3.1
	国語B	62.2	67.0	66.5	-4.3
	数学A	58.2	61.9	62.2	-4.0
	数学B	40.4	44.3	44.1	-3.7

- ・小中学校ともすべての教科において「全国平均正答率±5％」の範囲内にあり、学力は、「全国と大きな差はない」状況である。
- ・小学校では、B問題（主に活用）よりも、A問題（主に知識）に課題がある。
- ・中学校では、国語においては、小学校とは逆にB問題（主に活用）に課題がある。数学においては、A問題（主に知識）、B問題（主に活用）ともに課題がある。

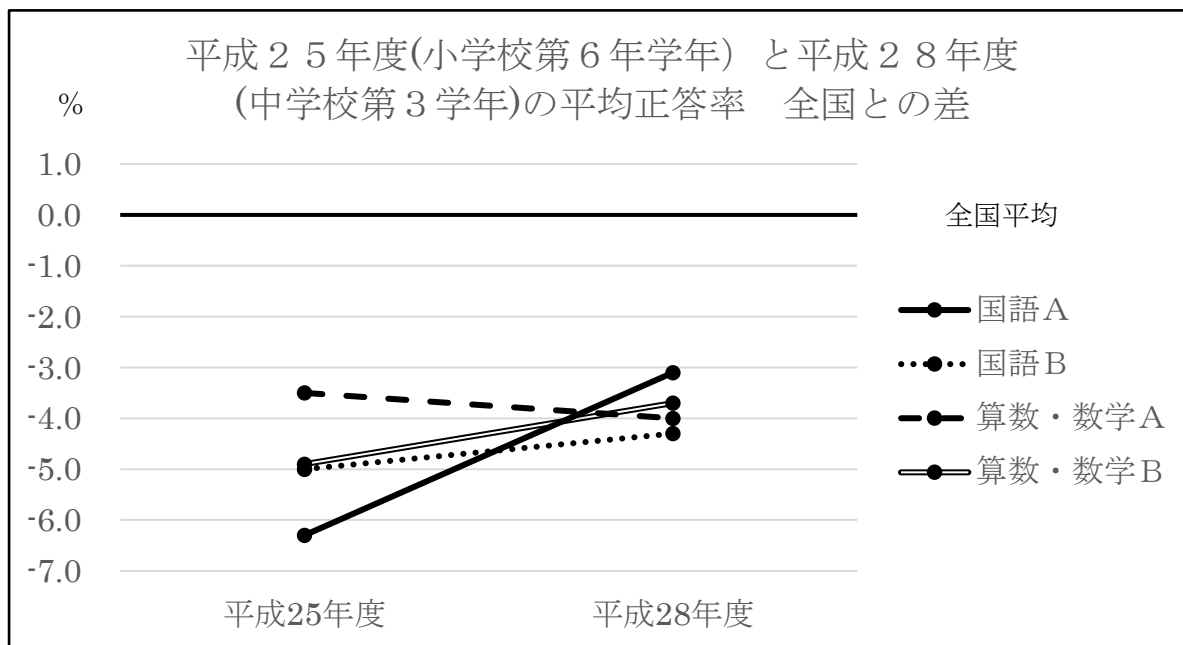
②直近4年間の平均正答率の経年変化





- ・ 小学校は2年連続で、中学校は4年連続で全ての教科が±5%の範囲内となり、「全国と大きな差はない」学力を維持している。
- ・ 小学校は、算数Aは、全国平均との差が広がっているものの、その他は差が縮まっている。
- ・ 中学校は、±5%の範囲内に収まっているものの、全般的に全国との差が広がっている。

③平成25年度（小学校第6学年）の結果と平成28年度（中学校第3学年）の結果の比較



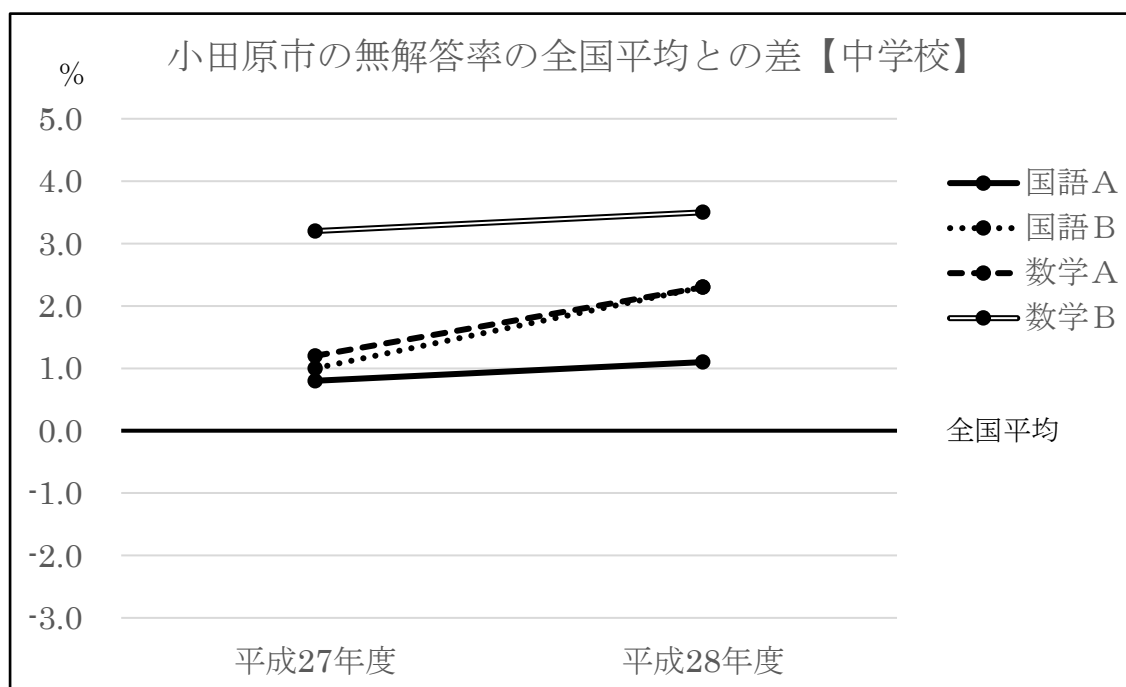
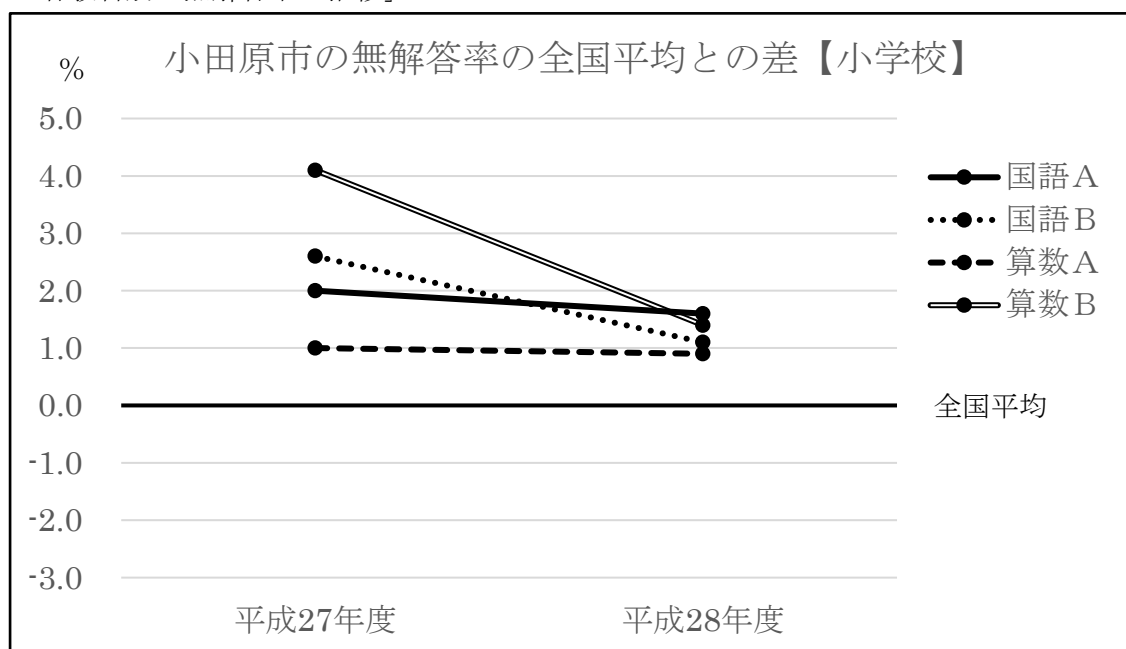
- ・ 平成28年度の中学校第3学年の結果を、平成25年度の小学校第6学年の結果と比較し、同じ集団の3年後の変化を見ると、全国平均との差が－3ポイント～－6ポイントあったものが、－3ポイント～－4ポイントと差が小さくなっている。

④無解答率について

<平成28年度調査 教科別平均無解答率（％）>

	教 科	小田原市	神奈川県	全 国	全国との差
小 学 校	国語A	6.9	7.9	5.3	+1.6
	国語B	5.7	6.0	4.6	+1.1
	算数A	2.7	2.5	1.8	+0.9
	算数B	8.8	8.7	7.4	+1.4
中 学 校	国語A	3.1	2.5	2.0	+1.1
	国語B	6.7	4.5	4.4	+2.3
	数学A	8.6	7.0	6.3	+2.3
	数学B	18.2	15.5	14.7	+3.5

「各教科別の無解答率の推移」



- ・小中学校とも、すべての教科の無解答率が、全国平均を上回っている。
- ・小学校では、すべての教科で本市無解答率と全国平均との差が小さくなっている。
- ・中学校では、すべての教科で本市無解答率と全国平均との差が大きくなっている。
数学Aでは、昨年度と比べ選択型設問が減り、短答型設問が増えており、原因のひとつであると考えられる。

(3) A問題（主として「知識」に関する問題）について

本市では、「漢字の読み書きや計算に関する設問」に課題がある。

知識や技能といった基礎的な学力は、「思考力・判断力・表現力」といった活用力の基盤をなすものである。したがって、ここでは漢字や計算に関する設問の状況を示した。

【小学校 国語A】(数値は平均正答率%)

設 問	小田原市	全 国
【漢字を読む】 「快晴」	81.1	79.3
【漢字を読む】 「貯金」	97.7	98.5
【漢字を読む】 「省く」	66.8	81.0
【漢字を書く】 「 <u>たね</u> をまく」	82.6	87.5
【漢字を書く】 「 <u>した</u> しい友人」	62.1	73.8
【漢字を書く】 「 <u>そう</u> だんする」	60.2	64.2

【中学校 国語A】(数値は平均正答率%)

設 問	小田原市	全 国
【漢字を読む】 「封筒」	97.0	97.6
【漢字を読む】 「報われた」	93.1	94.8
【漢字を読む】 「敬う」	72.5	82.6
【漢字を書く】 「 <u>けんきゅう</u> する」	76.4	83.5
【漢字を書く】 「 <u>どくそう</u> 的な考え」	20.1	26.1
【漢字を書く】 「花を <u>う</u> える」	84.9	89.9

- ・小学校では、6問中5問が全国平均を下回っており、内2問は10ポイント以上下回っている。
- ・中学校では、6問すべてが全国平均を下回っており、内1問は10ポイント以上下回っている。
- ・小中学校ともに「漢字の読み、書き」については引き続き課題である。



【小学校 算数A】(数値は平均正答率%)

設 問	小田原市	全 国
【計算】 「 $905 - 8$ 」	89.4	90.9
【計算】 「 $4.65 + 0.3$ 」	73.0	77.1
【計算】 「 $18 \div 0.9$ 」	74.7	77.7
【計算】 「 $\frac{2}{9} \times 3$ 」	82.4	87.0

【中学校 数学A】(数値は平均正答率%)

設 問	小田原市	全 国
【計算】 「 $\frac{2}{5} \times 0.6$ 」	63.9	66.9
【計算】 「 $-3 + (-7)$ 」	92.4	91.6
【式を作る】 「ある数を3でわると、商がaで余りが2になるとき、ある数をaを用いた式で表す」	23.7	32.2
【計算】 「 $(2x + 5y) + 3(x - 2y)$ 」	84.1	84.0
【hについて解く】 「 $S = ah$ 」	65.6	67.9
【方程式】 「 $x + 12 = -2x$ 」	65.4	71.3
【連立方程式を作る】 「 $2x + y = x - y = 3$ 」	87.2	89.7

- ・ 小学校は、すべての設問において全国平均を下回っており、引き続き課題である。
- ・ 中学校は、全国平均を上回る設問もあるが、全般的には全国平均を下回るものが多く、引き続き課題である。特に、立式が求められる設問の正答率が低く、計算技術だけでは解けない問題に課題がある。

(4) B問題（主として「活用」に関する問題）について

小学校においては、国語、算数ともにすべての問題で全国平均正答率を下回っているが、5%以上下回っている設問は少なく、「全国と大きな差はない」状況であるといえる。

中学校においては、全国平均正答率を上回る設問がある一方で、5%以上下回っている問題も多くある。

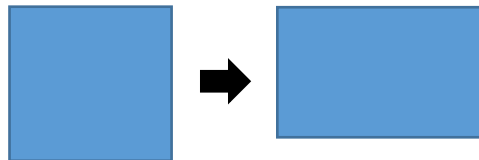
【小学校】

	設問数	全国平均を上回った設問数	全国平均を下回った設問数	内5%以上下回った設問数	備 考
国語B	10	0	10	0	
算数B	13	0	13	4	4問中2問が記述式設問

(設問例)

＜算数B **1** (2)＞ 小田原平均正答率 39.9% 全国平均正答率 45.2%

正方形の縦の長さを2cm短くし、横の長さを2cm長くすると、面積はどうなるかを、1辺が7cmの正方形を使って考えたとき、面積が4cm²小さくなることを説明しなさい。



実際の設問では、はじめに、この設問を解くための基となる考え方の記述があり、これを本設問の内容に合うように条件を変更して、面積がどう変わるかを考察することができれば解ける設問である。

日頃から、1つの成り立った事柄に対して、条件を変えて考えてみるといった場面を多く設定していく必要がある。

【中学校】

	設問数	全国平均を上回った設問数	全国平均を下回った設問数	内5%以上下回った設問数	備考
国語B	9	0	9	2	
数学B	15	2	13	6	6問中4問が短答式設問

(設問例)

＜国語B **3** (3)＞ 小田原平均正答率 50.7% 全国平均正答率 57.7%

「物語の一部」の内容を補足するような資料(本設問では「図鑑の説明」)を読むことによって、「物語の一部」のどの部分についてよく分かるようになりましたか。よく分かるようになった部分と、その部分についてどのようなことが分かったのかを文章で書きなさい。

文章の展開に即して内容を理解するとともに、目的に応じて資料を参考にしながら読み、分かったことについて根拠を明確にして書くことを求めている設問である。

文章を読み、理解するうえで参考となるような資料を活用し、具体的にイメージを膨らませて考えを交流するような場面を設定していくことが大切である。

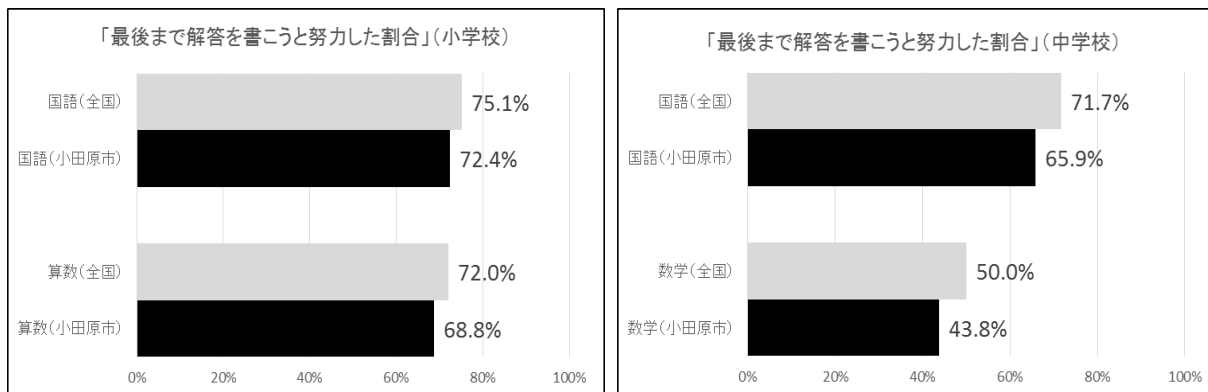


4 質問紙に関する調査結果

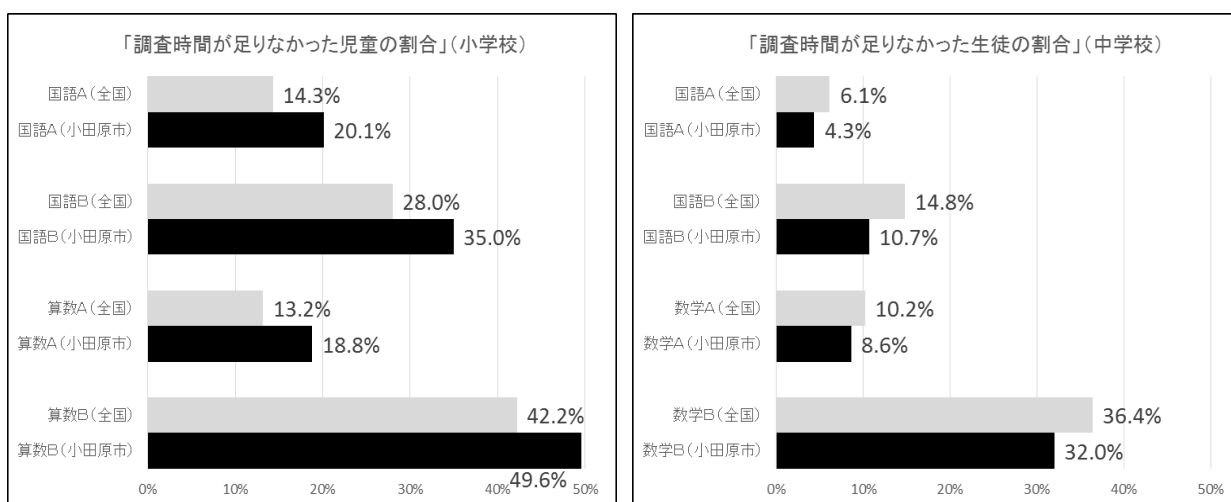
(1) 児童生徒質問紙より

小田原市として特徴的な質問紙の結果を小・中学校別にとめました。

①【文章題等において、最後まで解答を書こうと努力した割合】



②【調査時間が足りないと感じた児童生徒の割合】

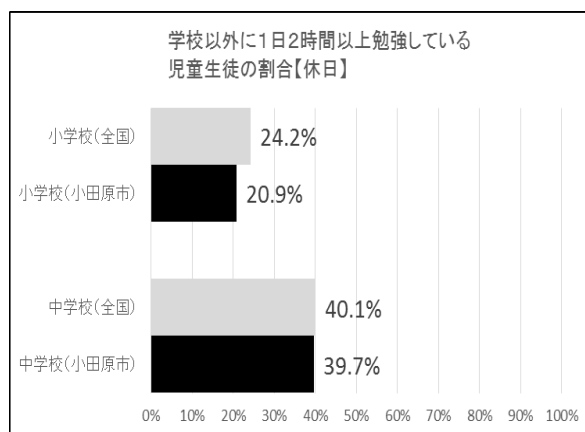
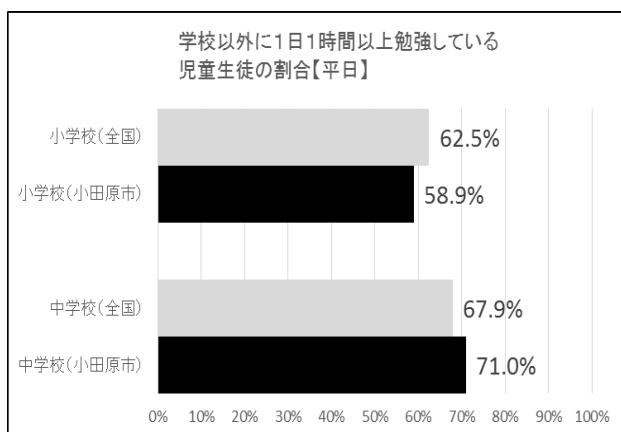


- ① 「最後まで解答を書こうと努力した」割合が、小中学校ともに全国平均を下回っていることから、児童生徒の本調査に対する意欲の低さが伺える。
- ② 小学校において、調査時間が足りないと答えている割合が全国平均より高いことから、時間が足りないことで、自分の力を発揮できていない児童がいることが伺える。

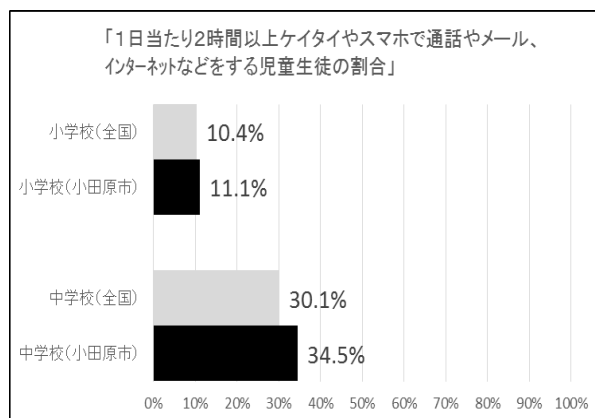
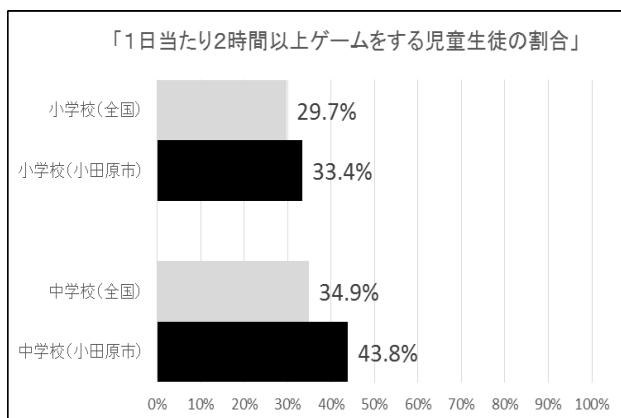
①、②については、本市の課題のひとつである「無解答率の高さ」の原因であると考えられる。本調査の意義や取組む姿勢について、児童生徒に事前に十分に指導し、保護者に対しても同様に十分に周知し、理解・協力を求める必要がある。

また、小学校においては、時間が足りなくなる原因のひとつに日頃取組んでいるテスト等の形式との違いが挙げられる。この原因によって自分の力を発揮できないのであれば、日頃から本調査のような形式の問題に取り組む必要もあるだろう。

③【家庭学習にかける時間】



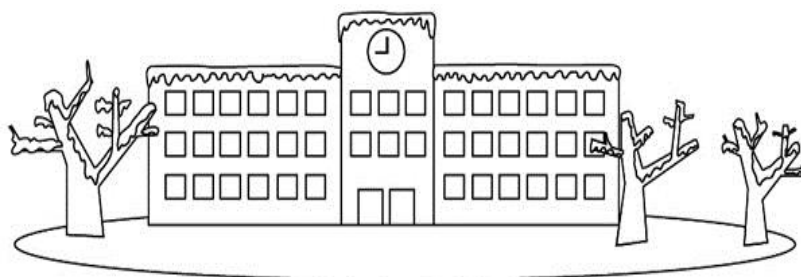
④【ゲームやスマートフォンにかける時間】



③ 家庭学習を行う時間については、小学校において全国平均を下回り、中学校ではほぼ全国並みである。

④ ゲームやスマートフォンにかける時間は、小学校、中学校とも全国を上回っている。特に小田原市の中学生の半分弱が1日に2時間以上ゲームをしていることについては、大きな課題である。

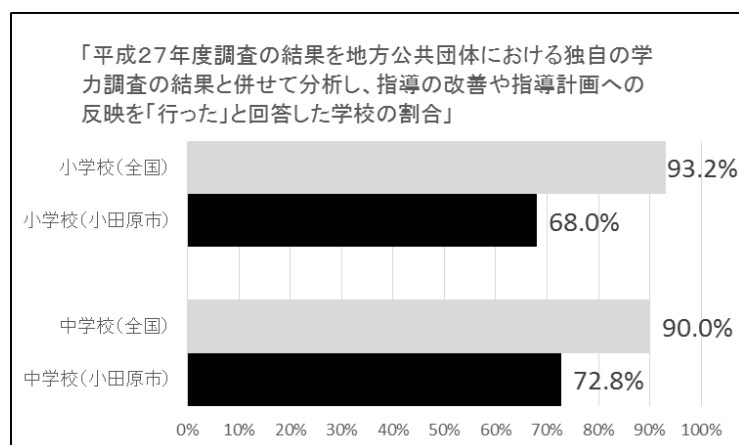
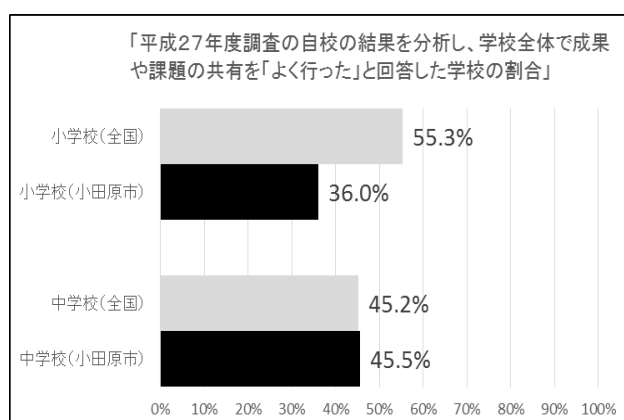
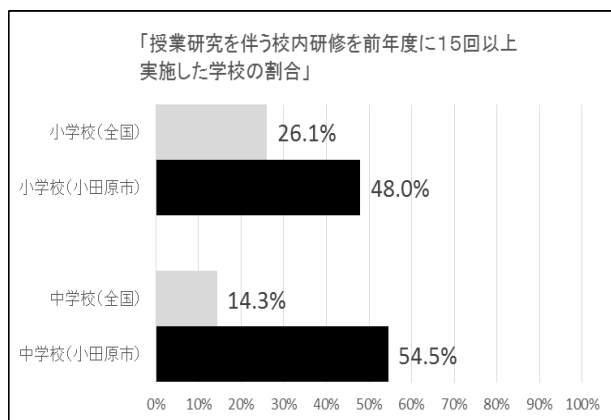
③、④は、下校後の時間の使い方を示している。全般的に全国平均よりも「学習時間が短く、ゲームやスマートフォンにかける時間が長い」という傾向がある。本市の学力向上を考える上では、「基礎的・基本的知識や技能の習得」、「思考力を育む授業改善」等だけではなく、「下校後の時間の使い方」の改善が大変重要である。



(2) 学校質問紙より

小田原市として特徴的な質問紙の結果を小・中学校別にとめました。

【授業研究の回数と調査結果の活用】



本市の教員は、言語活動を効果的に取り入れた、児童生徒主体型の「分かる授業」の研究に大変熱心に取り組んでおり、その割合は全国平均を大きく上回っている。その成果についても、「学びに向かう意欲的な態度」や「ワークシートの記載内容」「学校で行うテスト」等、学校内で検証を行っている。しかし、市全体で見ると、学力を示す客観的な資料である「全国学力・学習状況調査」の結果に表れているとはいえない。

原因としては、上のグラフにもあるように、授業研究と本調査の結果分析を別々のものとして取り組んでいるからではないか。自校の本調査の結果を分析し、分析結果を授業研究や指導計画に反映させることで、明確な目標のもと、授業改善や教育活動を行うことができる。そして、これらの授業改善については「PDCAサイクル」を活用して行うことが重要であり、より効果的な取り組みとなる。

